

有坂家 - 私のルーツ探し -

はじめに、私が我が家のルーツに興味を持ったきっかけを述べたいと思います。この始まりは、東京都立大学の慶谷壽信先生が私の叔父について調べていらっしゃる、7～8年前にその調査の一部を論文にしたものをいただきました。叔父の秀世は「音韻論」の研究をしていたのですが、慶谷先生は叔父の仕事を高く評価され、学問そのものだけでなく、そういう業績が生まれた背景として、叔父の生い立ちや祖父の事跡なども調査しておられました。それまで私は父のことさえあまり知らなかったのですが、これがきっかけとなって自分のルーツを探ってみたいと思うようになりました。

江戸切り絵図

とりあえず手がかりにしたのは祖父の海軍奉職歴でした。これは長兄の英雄が厚生省の地下の図書室で写してきたもので、それによりますと、出生地は東京市牛込赤城下片町とあり、生年月日は明治戊申辰年一月十一日とあります。しばらくして、神田の古書店で嘉永五年（1852）秋新刻の「小日向の切り絵図」に、有坂仁三郎という人物の屋敷があるのを見出しました。嘉永二年（1849）版の「切り絵図」でも有坂仁三郎の名前がみられますが、安政三年（1856）版では有坂理十郎となっています。また、「御府内沿革書絵図集」の天保元年（1830）の絵図では有坂利十郎となっていることが分かりました。この時点では有坂仁三郎、有坂利十郎（理十郎）が我々の先祖と直接関係があるか否か分かりませんでした。この場所は祖父の出生地である「牛込赤城下片町」という地名に合致しており、関係のある可能性が高いと思われました。

沼津

祖父有坂鋁蔵の著書に「兵器沿革図説」があり、その復刻版が昭和58年に原書房から出ています。その復刻版に中村義彦氏が解説を書かれており、鋁蔵の父の銓吉は「江川太郎左右衛門の配下にあった」という記述がありました。後にこれは誤りであることが分かりましたが、これから手がかりが得られないかと考え、人物叢書「江川坦庵」（吉川弘文館）の著者である仲田正之先生に伺ってみたところ、江川太郎左右衛門の配下に「有坂」という名は見たことがないが、調べてみましょう、と言って下さいました。始めに蕪山の江川文庫に電話してみてもちからから

仲田先生を紹介されたのです。何ヶ月か後に、仲田先生からお便りをいただき、沼津明治資料館の樋口氏が、曾祖父銚吉の名前を静岡藩の職員録に見出された由、お便りをいただきました。明治二年の「沼津御役人付」には有坂銚吉が静岡藩沼津郡方並として記載されており、翌三年には郡方として記載されていることが分かりました。

歴史フォーラム

当時、私はパソコン通信を始め、Nifty Serve に加入して歴史フォーラムにアクセスしていました。ある時、思い切って歴史フォーラムで発言し、「先祖について調べようとしているが、どのようにして調べたらいいか教えて下さい。」というメッセージを載せてみました。すると早速、フォーラムの責任者から発言があり、新人物往来社に歴史研究会というのがあるので、そこに連絡してみたら、と言うことでした。早速連絡してみたところ、そういうことなら家系図学会の事務局に連絡するといいと教えられ、事務局長の楡井氏とお話しする機会を得ました。その楡井氏から小川恭一先生を紹介していただきました。小川先生は、埼玉県史調査報告書「分限帳集成」の中の文化10年(1813)度「普請役分限帳」と「江戸幕府勘定所史料 - 会計便覧 - 」(吉川弘文館)に有坂という名前があると教えて下さいました。

「普請役分限帳」には有坂勝三郎の記述が見られ、その人が有坂弥右衛門の養子であることが分かりました。勘定所史料の方では、有坂理十郎と有坂銚吉の名前が見られ、理十郎と銚吉は親子関係であることがほぼ確かと思われました。また、この3人の住所がいずれも「小日向馬場先片町七軒町」とあるので、私どもの先祖であることはほぼ間違いのないと思われましたが、確かな関係は不明なまま残されました。

河合順輔という人

結局、最終的に上記の4人の人物(弥右衛門、勝三郎、理十郎、銚吉)の親子関係が分かったのは小川恭一先生から教えていただいた「江戸幕臣人名事典(二)」(新人物往来社、p.54)の記述でした。そこに河合順輔という人の記述が見えます。そこから、順輔の実父が有坂理十郎であること、実祖父が有坂勝三郎であっていずれも四川用水方普請役であることがわかりました。曾祖父の銚吉も四川用水方普請役見習であって親子関係がほぼ確かなことから、弥右衛門 - (養子)勝三郎 - 理十郎 - 銚吉 - 鋳蔵とつながることが分かりました。順輔は銚吉の十歳ほど上の兄であることになります。なお、「分限帳集成」には松平伊豆守信

綱「万治元年家中分限帳」があり、さらに古い人で、本国 上野（こうずけ）とする代官「有坂善右衛門」という人が見られますが、この人が先祖と直接関係あるかどうかは不明です。

有坂勝三郎

「普請役分限帳」によりますと、有坂勝三郎は、明和五年(1768)頃の生まれで、弥右衛門の養子となったことが分かります。寛政三年(1791)四月に弥右衛門から家督を相続し、譜代席なので家禄があり、非役待命の小普請組にいましたが、同年十二月に代々の役職である御留守居同心に就職し江戸城の中の番所勤めをし、同七年に代官伊那友之助の手付けとなりました。「武鑑」によれば当時伊那友之助は寛政から文化にかけて馬喰町御用屋敷を陣屋としていました。寛政十年、同十一年、享和三年(1803)と昇進して、郡代組付き（郡代屋敷の事務官）となりました。そして、文化二年(1805)に普請役になっています。勝三郎の本国は上野、生国は武蔵なので先祖の出身地は上野と思われます。高三拾俵三人扶持、そのうち拾俵が御足高です。壱人扶持が御足扶持なので、差引二十俵二人扶持が有坂家の代々相続する家禄だったことになるでしょう、と小川先生から御教示をいただきました。

勝三郎は既に文化十年（1813）に小日向（先片町七軒町）に住んでいることが江戸切り絵図から分かります。また、伏見弘氏から御府内沿革図書（「地図で見る新宿区の移り変わり」所収、牛込編 p.252）に有坂家の記述があることを教わりました。勝三郎は内藤新宿（現在の花園神社前）に屋敷を持っていましたが、文化六年(1809)に朝比奈氏との対替で新宿から引っ越したことが分かります。

有坂理十郎

理十郎が勝三郎の息子であることは上記の河合順輔についての記述から明らかです。上記「江戸切り絵図」の小日向地区の地図には有坂仁三郎（にさぶろう）の名前が見えることを述べましたが、この人物は不明です。しかし、理十郎と同一人物である可能性が高いと思われます。当時は人が名前を変えることはめずらしくなく、自分の新しい役職の上司に同じ名前の人がいると遠慮して改名することなどはよくあったということです。

上記「江戸幕府勘定所史料 - 会計便覧 -」には理十郎の名前が四川用水方普請役として数回にわたって見られます。即ち、天保十年（1839）、弘化三年（1846）、弘化四年（1847）には理十郎のみで、嘉永二年（18

49)、嘉永三年(1850)、安政三年(1856)、安政四年(1857)、安政六年(1859)には普請役見習の銚吉と共に記載されています。

先に、パソコン通信の歴史フォーラムのことを書きましたが、理十郎の仕事の内容を窺うことのできる史料が「柏市史」に載っていることを、「取手市史」の編纂をなさっていらっしゃる藪原敏吏氏から教えていただきました。理十郎が何回かにわたって住民に回状を出しています。この結果、理十郎は特に小貝川担当であったと推測されました。

なお、その後小川恭一先生から戸森麻衣子氏の「近世後期の幕僚代官所役人 その「集団」形成をめぐる」と題する論文(史學雑誌第110編第3号所収)を紹介していただきました。それによりますと、理十郎は館柳湾(雄次郎)の三女万世を娶っています。万世は三男一女をもうけました。年齢から考えて、河合家に養子に行った順輔が長男、次項の銚吉が末子と思われます。館柳湾 宝暦一二(一七六二)~天保一五(一八四四)は江戸で漢詩人として知られた人で、代官所手付を務めました。館家と有坂家の関係については最後にまた触れます。

有坂銚吉

曾祖父銚吉について父からは静岡の侍で身分はあまり高くなかったらしい、という程度のことしか聞いていませんでしたが、すでに述べましたように、幕末まで四川用水方普請役見習をしていたことが分かりました。銚吉も上記の小日向馬場先方町七軒町の屋敷に住んでいたはずですが、同地の南側は小高い丘の上に赤城神社があります。その牛込郷社「赤城神社誌」(大正11年10月25日発行、平成5年癸酉1月復刻、伏見弘氏より情報を頂く)には、「。。。。神鈴響く処、『赤城社』と認められた額は慶応元年乙丑秋九月有坂銚吉書とある。。。。」とあり、銚吉が同社本殿の額に「赤城社」と揮毫したという記述があります。残念ながら、赤城神社は戦災で焼け、額は残っていません。銚吉の静岡移住後の職責の経緯については既出の樋口氏から3年ほど前にいただいた手紙を引用したいと思います。

『駿東郡的場村(現在の清水町的場)の名主をつとめた豪農贅川家に伝来した古文書の中に「日下恵」(明治2年)という表題のものがあります。これは、静岡藩からの布達を名主が書き留めた帳面なのですが、その中に明治元年11月に写したという「駿河地方御掛り御姓名高附」という部分があり、駿河国が20に分割され各担当の「地方御掛り」に

よって支配されたことがあります。そして、その20の中に駿東郡八幡村を本拠として高10,867石6斗4升5勺を担当支配した「飯田藤次郎・有坂銚吉・羽生田直三郎」の名前があります。

有坂銚吉ら、すなわち静岡藩の八幡役所が支配した1万石余が具体的にどの村々なのかについては、残念ながら記載はありません。しかし、八幡村を中心に、現在の清水町や沼津市東南部の村々であったことは間違いありません。

20の支配地はそれぞれ1万石前後を担当しており、駿河国の総石高は23万石余りでしたので、八幡役所のそれも特に他と比較して多いとか少ないというわけではなかったようです。有坂銚吉は普請役だったという幕府時代の経歴を買われて、黄瀬川に接し、橋や東海道の往還をかける支配地を担当することになったのかも知れません。』

それ以降については、前田匡一郎氏の「駿遠へ移住した徳川家臣団」に記述があることを小川恭一先生から教えていただきました。それによりますと、銚吉はその後、明治二年静岡藩沼津郡方並、同三年静岡藩沼津郡方を勤め、同5年6月に宮内省に出仕しています。宮内省13等出仕ということでしたが、同年8月には任宮内中録、同7年宮内省9等出仕、同十年宮内四等属に任ぜられた後、おそらく病を得て明治14年2月12日に依願退職し、7月23日に亡くなっています。

銚吉は寺子屋で教えていたということをお父から聞いていましたが、それに関する資料はそれまでなにもありませんでした。しかし、別の方向からこれを確認することができました。銚吉は長女が夭逝した後、石川周二の三男石川季三を養子にもらっています。石川周二は勘定所詰めの普請役で静岡にやはり移住しました。元御家人でしたが、文久二年に旗本となり、御天守番之頭に昇進しています。静岡移住後は、横須賀奉行所の添奉行となり（奉行は男谷勝三郎）、沼津権少参事郡政方となっていますから、沼津では銚吉の上司であったわけです。この石川周二の次男の石川千代松は、かの大森貝塚発見者で東京帝国大学動物学教授となったエドワード・モースの弟子で、ダーウィンの進化論を広めた人として知られています。千代松も後に東京帝国大学動物学の教授になりました。その石川千代松が「老科学者の手記」という著書を残しており、その中で、

「八幡村の陣屋にいた頃、私は漢学を小林という先生に教わり、習字を有坂先生（今の工学博士有坂鋁蔵君の御尊父）に、又英語を三谷と云

う先生と、沼津に居られた乙骨先生（太郎乙）とに教わったのである。」（老科学者の手記 p.12）

と記しており、銚吉が書を嗜んでいたこと、そして習字を教えていたがわかります。これを支持するように前述の樋口氏から、東京掃苔録という明治初期の著名人の墓地をリストした書物に、銚吉が谷中墓地の項に「有坂菱湾（書家）名銚吉、明治14年7月23日没」と記されていると教えていただきました。また、伏見弘氏は江戸末期の「安政文雅人名録」という冊子に銚吉が書家として記載されていることを指摘されました。

理十郎の項で記しましたように、館柳湾は銚吉の母方の祖父にあたります。また、柳湾の従弟に書家として著名な巻菱湖があり、柳湾を終生慕っていたということです。これは推測ですが、銚吉が書家として用いていた「菱湾」という号は、菱湖と柳湾の菱と湾から取ったものと思われる。

静岡の移住先

銚吉が家族と共に静岡に移住したのは明治元年9月頃と推定されますが、移住先については祖父の残した随筆集である「象の欠伸」に幼少の頃の家の周りの記憶についての記述があり、そこから移住先は清水町八幡村（八幡神社の近く）陣屋の南側と結論されました。私は一度、息子を連れて清水町を訪れ、八幡神社を訪ねましたが、八幡神社の宮司さんが大変親切に対応してくださいました。祖父の随筆をお見せしてお考えを伺ったところ、現在コナカ洋服店のビルのある辺り、と特定することができました。そこからは晴れていれば富士山がよく眺望でき、北西には愛鷹山、南には香貫山が見えます。周辺を散策し、祖父の随筆にある柿田川湧水群や千貫樋を見物して帰りました。

すでに述べたように、明治5年6月12日に銚吉は宮内省に出仕していますので、これに先だって東京へ移住したはずですが、これに関連して、樋口氏から銚吉が沼津市大岡（木瀬川）の大古田長平氏宛に小包（同年11月10日付）を送っており、その包み紙が見つかったということで、そのコピーを送っていただきました。銚吉の筆跡を初めて見ることできたのですが、この手紙の発信場所から、銚吉一家は湯島の近くに引っ越してきたものと思われる。ちなみに、大古田家は木瀬川村の名主を務めた有力農民だったそうです。

その後 - 鋳蔵・石川千代松・エドワード・モース

私のルーツ探しはこれで一応の区切りがつかいましたが、祖父のことに若干ふれたいと思います。銚吉は石川家から季三を養子としてもらいましたが、季三は22歳で亡くなり、鋳蔵が家督を継ぎました。石川千代松は義理の兄に当たり、モースの弟子でしたが、その関係で、鋳蔵は千代松に連れられて、当時東大構内の官舎に滞在していたモースをしばしば訪れたようです。モースが初めて来日したのは明治10年(1877)ですが、鋳蔵は大正15年2月号の人類学雑誌のモース先生追悼号に「思ひで」という一文を寄せ、次のように述べています：

「・・・先生は子供が好きであった。私共のようなものにさへも、愉快に丁寧に色々なことを教へられた。・・・私の考古の癖は12-3歳頃からであったが、多少具体的に採集をやったり、又此の方面に多大の興味を持つやうになったのは、一重に先生の指導の御陰であると常に感謝している。其れから3、4年後故坪井博士や白井博士などが同じ道を嗜まれるので、此等の諸先輩と共同して此の方面に向かつて取調をしたり、相携えて採集に出かけたりするやうになった。・・・」

鋳蔵は15歳の時に向丘の丘で完全な形の土器を発見し、これが後に弥生式土器と呼ばれるに至りました。鋳蔵は東京帝大工科大学の造兵学科に入学し、第一期生として卒業後、フランス(ルアーブルの)に留学して大砲の設計を学びました。後に呉の海軍工廠長・造兵中将となり、東京帝大教授を併任しました。考古学の道には進みませんでした。終生考古学に興味と関心を持ち続けました。

なお、鋳蔵の妻敏子は前田亨と妻「しよ」の次女ですが、しよは既述の館柳湾の孫(柳湾の次男で家督を継いだ俊(霞)の娘)にあたり、有坂家と館家が理十郎と万世、鋳蔵と敏子の二カ所で結ばれていることが分かりました。